

## 2 市民をとりまく環境

——ある家族と先生の会話形式で——

登場人物

父 東京の会社に通勤するサラリーマン。四五歳前後。

母 家事。四〇歳をすぎたころ。

娘 大学生。

息子 高校生。

先生 父の高校以来の親しい友人。横浜市内の高校の社会科教師で、同僚たちと市政研究のサークルをつくっている。

ある日曜日、先生は友人からの呼びだしをうけて、横浜市内の団地に住むその友人の家庭を訪問。

先生 なんです。資料をもってきてくれ、などと急に。

母 ほんとにすみません。わざわざおこしいたいで。父 ちよつと、君の知識を拝借したいことがおこったものでね。

娘 先生、本籍地というものには、どんな意味がある

のですか。

先生 またヤブから棒に、どうして。

母 (笑いながら) 娘の就職の書類に戸籍謄本がいるのですよ。うちは本籍が東北のM市にあるでしょう。だから、速達でM市役所に謄本をたのんでも、くるまでには一週間以上みなぎやならないのです。こんどは、それでまにあうにはまにあつたのですがね。子どもたちは、今後のこともあるから、このさい、本籍を横浜に移そう、といひだしたのです。

先生 なるほど。

父 たしかに、横浜に移したら、謄本でも抄本でも区役所ですぐもらえるのだし、便利になることはよくわかるのだがね。

先生 便利になるのはわかるが、M市にも未練がある——ウサギ追いかの山が忘れがたく、というわけなんだな。

母 もぎたてのリンゴの味、忘れられませんわ。それに、いまでも五月になるとH山にはスズランが咲くの

ですよ。

息子 でも、M市に帰って暮すことは、もうないのだらう。

母 おそらく、ずっと横浜でしょう。 ねえ。

父 まあね。

先生 そういうことだったのか。そうすると、君たち一家はこれからもずっと横浜に住む覚悟だが、本籍をM市においておくことによって、なんとなく故郷の山河とつながりを残しておきたい——というのが両親の意見。どうせ帰らぬ故郷なから、このさい本籍を横浜に移したら——というのが二世たちの意見。そこで本籍地とはなにか、ということになったのだね。それはわかった。だが、市政研究の資料をもってこい、というの。

父 いや、僕たち夫婦も、結局は子どもたちの意見に同調することに決めているのだがね。ただ一〇年前、公団アパートの抽選にあつたという、ただそれだけの理由で横浜の住民になつたわれわれが、こんど若干

の感傷をこらして本籍をここに移そうというのだ。もちろん本籍などというものは、いつでも、どこへでも移せるものだということはわかってはいるが、いざ移すとなると、積極的に横浜市民になる意思表示のような気もしてね。

母 それで、改めて横浜のことを、少しまとめて知りたいという殊勝な考えをもったわけですよ。

娘 先生、横浜は、よその市よりも深刻な都市問題をかかえているのでしょうか。

先生 ええ。その前に参考までに本籍地の話ですがね。法律的には、ただ戸籍の正本を保管している役所の所在地といったそれだけのことです。だから便利ということからいえば、現住地の役所に戸籍を移すのがまず便利ということもいえますよね。ところが、現住地を本籍地に行っている人は案外に少ない。このあいだ、保土ヶ谷区の古い宿場町である住宅街の保土ヶ谷町と、約一〇年ほど前に日本住宅公団が建てた明神台団地を調べてみたが、保土ヶ谷の方でも、約七九〇世帯のう

ち現住地が本籍地という人とそうでない人の比率はほぼ半々。明神台では、約一、一八〇世帯のうち、現住地に本籍をうつしているのはわずかに一九〇世帯しかない。

息子 じゃあ、この団地でもそんな割合かな。

先生 現住地以外に本籍のある人の中には、市内の他の町に本籍をおく人も、もちろんありますが、やっぱり多くの横浜市民が、いまま関東の各地や、東北・関西などよその土地に本籍をおいているのですね。この中には、本籍のことなどには無関心で、これという支障もないので、むかしのままにしている人もあるでしょう。だが中には、将来災害にあつたり、年老いたりした時に帰ることのできる「くに」として、意識的に籍を移さない人もあるでしょう。これまでのわが国では、こういう意味で「くに」をもちながら都会で生活している人の数が、かなり多いのが特徴だといわれています。その人たちにとっては、現住地はやはり、永住の都市といった感じのものではない。

父 都会で働いて、やがては「くに」に帰る。そういう人は、横浜にもずいぶんあるのだろうね。

先生 さあ。よくはつかめないが、人口が「都市」に集まる時代ですから、逆にいわゆる「いなか」に帰ろうという人の割合は、むかしほどではないのかも知れない。それに、現代は工業化社会から、情報化社会

への転換期といわれていますね。こういう時代には、土地だとか、住まいだとか、まして「くに」などへの執着はしだいになくなるだろう、という見方がある。それによると、人びとは個性が欲する多様な価値を求めて、あの土地からこの土地へ、さらにはつぎの土地へと自由に移動するようになるというのですね。いわ

表 1—3 ふるさと調査 1

	横浜市
1. 当市をふるさとと考へ、死ぬまで当市に住みたいと願っている市民	41.6%
2. 当市をふるさとと考へているが、当市に死ぬまで住もうと思わない市民	7.4
3. ふるさととは当市以外、そのふるさとにはほとんど行かないがなつかしく思っている市民	6.9
4. ふるさととは当市以外、そのふるさとをなつかしく思わない市民	1.2
5. ふるさととは当市以外、ときどき行きなつかしく思っている市民	37.3
6. ふるさととは当市以外、ときどき行かないがなつかしく思わない市民	3.7
7. ふるさととはどこかわからない、当市に永住したい市民	1.3
8. ふるさととはどこかわからない、当市に永住したくない市民	0.6

資料：「六大都市と市民 昭和40年」(指定都市企画調査事務主催者会議)

表 1—4 ふるさと調査 2

不測の事故の場合、ふるさとに帰る人・帰らない人  
(ふるさとが当市以外の場合)

	横浜市	名古屋市	京都市	大阪市	神戸市	北九州市
帰る	40.9%	41.0%	52.3%	43.2%	39.6%	56.7%
帰らない	50.9	43.4	37.8	46.1	48.3	34.4
わからない・無回答	8.2	15.6	9.9	10.7	12.1	8.9

資料：「六大都市と市民 昭和40年」  
(指定都市企画調査事務所主催者会議)

ゆる動く民、ホモ・モーペンスの考え方ですが。

父 しかし、それはよほど才能のある恵まれた人が、それとも若いうちの考えじゃありませんか。働けなくなつた老年のことを思うと、いまの社会保障のもとでは、まだどうも……。

母 やはり、私たちには不安ですよ。永住の土地や家がないことには。

先生 ところで問題は別になりますが、永住といえ  
ば、昭和四十五年十月に発表された東京都の『都市生  
活に関する世論調査』によると、東京を永住の場とし

て「悪い」と評価したものが三五パーセントもありま  
したが、これはなにも東京にかぎつた傾向ではない。  
多かれ少なかれ、大都市に共通した生活環境悪化の問  
題ですね。昭和三十年代にはじまる経済の高度成長、  
企業独走のなかで、人間の環境はすっかり破壊され、  
それが生活にも文化にも荒廃の影を色濃く落してきた。  
だから、現在住む都市に永住する意思のあるなしにか  
かわらず、市民にとって最低限の生活環境をまもるた  
めに、さらには都市に自由にして清新な雰囲気を取り  
もどすために行動することは、いわゆる「七〇年代緊

急の課題」になってきています。暮しにくい今日の都市を、どうしたら「だれでも住みたくなる都市」に改造することができるか。市民が力をだしあつて、挑戦し、打勝たなければならぬ難題は山ほどあります。

さて、そこで横浜の問題にかえって言えば、まず第一に、急増を続ける人口をあげるべきでしょうね。二〇〇万人級の都市で、毎年人口が九万から一〇万近くもふえるようなところは、ちょっと調べてみたかぎりでは、世界のどこにもみあたらない。さきほど話がでかかったように、たしかに横浜の都市問題は、他の都市とくらべてはるかに深刻ですが、その理由の一つには、どの問題にもこの異例な人口の集中が前提条件にあるため、解決をいっそうむずかしくしているということをおあげることができます。

父 それでは、このへんで人口のことから始めてもらいますか。

先生 ええ。ただ都市問題は、因果関係がお互いにからみあっているので、一つひとつを切り離して考える

ことは無理ですね。と、どこどこで重複するということをおあらかじめご了解いただいて、まあ、雑談ふうに始めましょう。